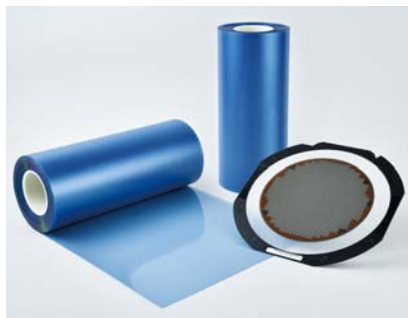


## 半導体チップの耐久性や信頼性向上に貢献する新たな製品を開発

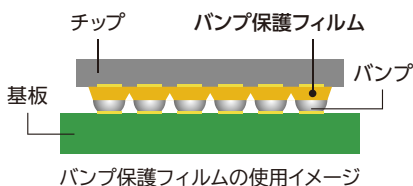
電子機器の小型化・軽量化・高機能化が進む中、そこに搭載される半導体のパッケージング技術として小型化・軽量化や基板への高密度実装を実現する「WLCSP\*」と呼ばれるプロセスが注目されています。

このプロセスでは構造上、半導体チップの表面に基板接続用のバンプ(突起電極)が形成されており、熱による変形や応力などの負荷が掛かると、この部分に亀裂が生じるリスクがありました。当社ではバンプを樹脂で保護することでこれを抑制し、チップの耐久性や信頼性を向上させるバンプ保護フィルムを開発。本製品は、半導体ウェハの裏面研削工程の際に表面を保護する機能も兼ね備えており、既存の当社バックグラインド用テープラミネーターもご活用いただけます。また、バンプの形状や大きさの違いに応じてカスタマイズすることで、お客様のウェハに最適な提案も可能です。当社では、今後も半導体チップの信頼性向上に貢献するテープや装置、製造プロセスの開発に努めていきます。

\*WLCSP(Wafer Level Chip Scale Package)：ウェハ上でパッケージとしての処理を加え、最終的にウェハを切断した後、基板に直接チップを実装するプロセス



バンプ保護フィルムと半導体ウェハ



バンプ保護フィルムの使用イメージ

## INTERVIEW

当部ではお客様の声や市場の技術トレンドなどにアンテナを張り、研究開発部門と連携しながら、半導体製造工程における新たな事業企画の立案を常に模索しています。新製品であるバンプ保護フィルムは半導体チップの耐久性や信頼性を高めるために直接使用される材料として、その将来性に大きく期待しており、スマートフォンのほか、電子デバイスの重要性が急速に高まっている自動車用途に搭載される半導体パッケージ向けに提案していきます。さらに、拡販に当たっては当社の強みである“お客様に寄り添ったカスタマイズ力”を発揮することで、満足いただける価値を提供できるよう努めてまいります。



アドバンストマテリアルズ事業部門  
事業企画部 副部長  
なかやま たけひと  
中山 武人

# 自分への投資が最高の投資

宮本 亜門

結果的に、投資というのは、「自己投資」が一番だと思っている。

数字だけを追い求めるのも違うし、興味の無いものにお金だけのために関心を寄せるのも心に悪い。自分への自己投資は学び直しなどもあるが、健康への時間やお金の使い方も自己投資だと思っている。20代以降、ロンドンやNYへ足繁く通い、さまざまな舞台を観て目を肥やしていた。それは今でも変わっていない。ただ、コロナ禍になって、オンライン上やSNS、ネット配信などのものに触れることで、Web3の世の中が来る前提で、最近では若い方の力を借りて、なんとかこれまでやってきたことをテクノロジーと掛け合わせることで新たなコンテンツ作りが出来ないか模索している。

昔は先輩こそ、経験を積んだ人こそという思いがあり、なんとなく自分より上の方に教えを請うようなことが多かった気がする。この年齢になり、しかもインターネットの時代は、若ければ若いほど感性とスキルが凄くて、どうしても教えを請う側になる。これも自己投資だと思い、謙虚に精進している。

今新たなコンテンツとして自分なりに考えていることが4つある。元々、映画監督になるか演出家になるか、と考えていたこともあるぐらい、映画や映像には今でも興味がつきない。配信が爆発的に伸びたコロナ禍以降、今でもSNSでの

ショート動画や配信作品を見続けている。舞台は「ライブでこそ!」と言い続けていただけない、大転換のような気もするが、共通なことも多いので、この際掛け合わせてさらに新しいテクノロジーで可能性を探りたいと思っている。

まず、考えているのが「AIと演劇の未来」。

自分自身も演劇やミュージカルは単なる娯楽ではなく、共感や感動、それだけではない、心の豊かさや人間の成長をさせてもらった。これだけでも自己投資なのだが、ライブとAIを融合することで、「もしも～ができれば」という空想が膨らむ。例えば、鑑賞時に観客が「感動」「歓喜」「悲しみ」「怒り」など、どこに一番心が揺れたかという数値が瞬時に出たりすることで、脚本の内容や音楽、セリフの言い回しを調整していくことができないか?とか。もちろん、AIに脚本やプロットを書いてもらったり、曲のイメージをたたき台として作ってもらったりすることは、すでに始まっていると思う。クリエイティビティをAIと掛け合わせて、これまで感じたことのない、見たことのない挑戦をやってみたいと思う。

次に、最も相性が良さそうな「MR (Mixed Reality)と演劇」。

MR技術の進化により、演劇体験がより没入型で臨場感のあるものになることが期待される。MR技術を用いた演劇体験は、これまでにない、リアルな人物と仮想空間の融合によって生み出



宮本 亞門 (みやもと あもん)

1958年1月4日生まれ。演出家。2004年、東洋人初めての演出家として、ニューヨークのオンブロードウェイにて「太平洋序曲」を手がけ、同作はトニー賞4部門にノミネートされる。主な作品に、芝居「金閣寺」、オペラ「蝶々夫人」、能×3D「幽玄」など、ミュージカルのほか、ストレートプレイ、オペラ、歌舞伎、能など、ジャンルを越える演出家として国内・海外で精力的に活動している。受賞歴に、文化庁芸術祭賞、朝日舞台芸術賞秋元松代賞、服部 真二賞、澄和 Futurist賞など多数。

され、感情や共鳴が倍増させる場になりうる。これにより、従来のブロードウェイや配信プラットフォームにとらわれない新しい演劇体験が生まれることで、市場が拡大する可能性がある。演劇製作におけるMRの活用は、視覚的な魅力や臨場感を高め、新たな視聴体験を提供することで、ブロードウェイを超える市場を開拓するきっかけとなるかもしれない。これも新たな投資になる可能性は大である。

そして、「ショートフィルム」。

映画が作りたいと叫び続けて、5年。ただ、この5年で映像の世界もずいぶん激変したように思う。TikTokが台頭してきて以来、YouTubeやインスタグラムも短い動画が主流になってきている。現在の私たちの1日の情報量は平安時代の人の一生分と言われているそう。若い世代こそ、タイムパフォーマンス(タイパ)を求め短い動画で情報を処理しようとしている中、もう長い映画や映像は見なくなっている。ショートフィルムは今後の未来に有効ではないか。ショートフィルムは低コストで制作されることが多く、インターネットやSNSを通じて広範な視聴者に見てもらえるため、投資家にとっては比較的风险が低く、高いリターンが期待できる投資先として魅力的だと思う。最近ショートフィルムのプラットフォーム(サマンサなど)も現れてきており、ショートフィルムがより多くの投資家の関心を引くこと

で、エンターテインメント産業全体の市場規模が拡大し、新たな投資機会が生まれる可能性があるのでは?と思い、今まさにプレゼン中である。

最後に、「映画」の未来。

映画産業は、単なる娯楽だけでなく、社会的メッセージや文化的遺産の伝承など多岐にわたる影響力を持ち、私も子どもの頃から人生の学びだった。AIや新技術の導入により、映画製作プロセスが効率化され、より多くの作品が制作される可能性があり、オンライン上のプラットフォームが次々生まれて、すでに映画館だけを見る機会はほとんどの人がないのではないか。なので、映画産業全体の市場規模が拡大し、新たな市場や投資機会が生まれると感じている。ハリウッドやブロードウェイを超える市場が存在する可能性も高く、投資家にとって注目すべき未来展望となるだろう。

資本主義も行き過ぎてしまい、世界は大混乱の真っ只中。今考えたいのは、お金だけで回ることだけではなく、まず足元の自分への自己投資、そして、人間の成長ではないか。文化や芸術はそのためにあると今でも信じている。世界経済や世の中のニュースから一度目を逸らして、自分自身へ目を向けると、世界で最も大切な自分自身という宝物に気付かされるのかなと思っている。

## 連結財務諸表

### 連結貸借対照表(要約)

(単位：百万円)	当連結 会計年度	前連結 会計年度
流動資産	187,977	171,936
固定資産	145,664	132,945
<b>① 資産合計</b>	<b>333,642</b>	<b>304,881</b>
流動負債	75,918	59,823
固定負債	24,739	17,906
<b>② 負債合計</b>	<b>100,657</b>	<b>77,730</b>
<b>③ 純資産合計</b>	<b>232,984</b>	<b>227,150</b>
負債純資産合計	333,642	304,881

### 連結損益計算書及び連結包括利益計算書(要約)

(単位：百万円)	当連結 会計年度	前連結 会計年度
<b>④ 売上高</b>	<b>276,321</b>	<b>284,603</b>
売上総利益	61,407	63,174
販売費及び 一般管理費	50,779	49,378
<b>⑤ 営業利益</b>	<b>10,628</b>	<b>13,796</b>
経常利益	11,537	15,602
税金等調整前 当期純利益	9,452	15,862
<b>⑥ 親会社株主に帰属する 当期純利益</b>	<b>5,243</b>	<b>11,512</b>
包括利益	11,602	27,307

### 連結キャッシュ・フロー計算書(要約)

(単位：百万円)	当連結 会計年度	前連結 会計年度
営業活動による キャッシュ・フロー	39,205	5,936
投資活動による キャッシュ・フロー	△21,512	△12,138
財務活動による キャッシュ・フロー	△1,288	△12,775
現金及び現金同等物に 係る換算差額	1,954	2,231
現金及び現金同等物の 期末残高	52,396	33,857

① 「棚卸資産」の減少がありましたが、「現金及び預金」や「有形固定資産」の増加などにより、総資産は287億60百万円増加しました。

② 「支払手形及び買掛金」や「長期借入金」の増加などにより、負債は229億27百万円増加しました。

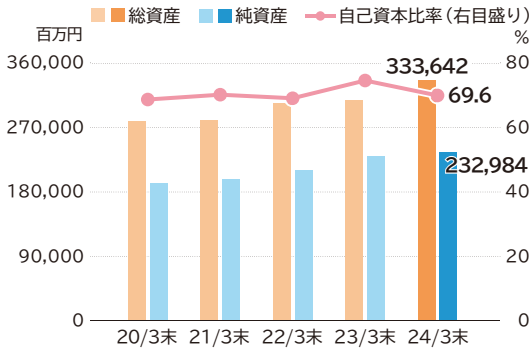
③ 円安の進行による「為替換算調整勘定」の増加などにより、純資産は58億33百万円増加しました。

④ 価格改定や円安効果に加え、第三四半期以降、半導体・電子部品関連製品やシール・ラベル用粘着製品を中心に受注は回復傾向にありましたが、上期の販売数量減少をカバーするまでには至らず、売上高は82億81百万円減少しました。

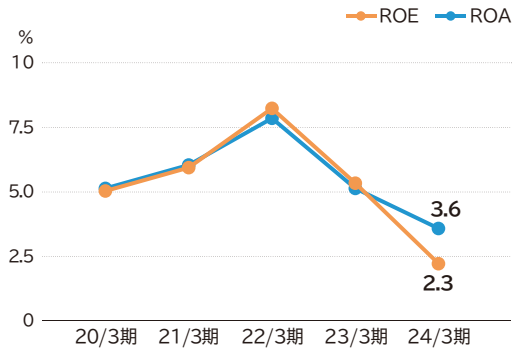
⑤ 売上高の減少があったほか、パルプをはじめとする原燃料価格の高止まりや受注減少による生産設備の稼働率低下に伴う操業損失もあり、営業利益は31億68百万円減少しました。

⑥ 韓国と台湾の連結子会社の解散決議に伴う特別損失を計上したことなどにより、親会社株主に帰属する当期純利益は62億69百万円減少しました。

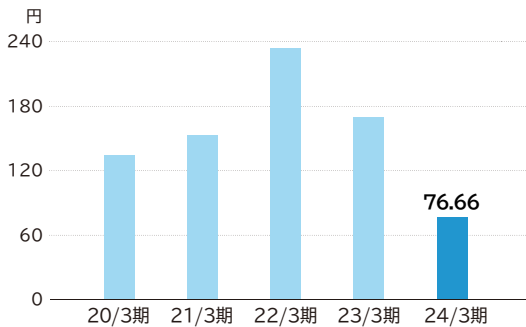
### 総資産・純資産・自己資本比率



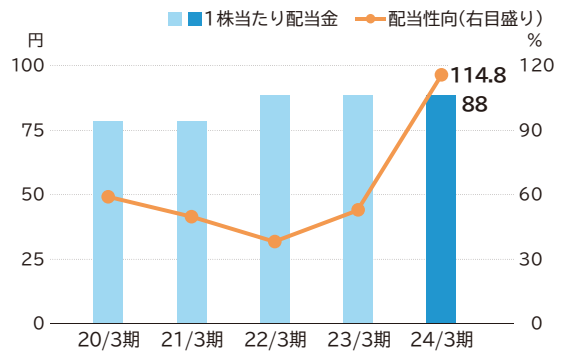
### ROE (自己資本当期純利益率)・ROA (総資産経常利益率)



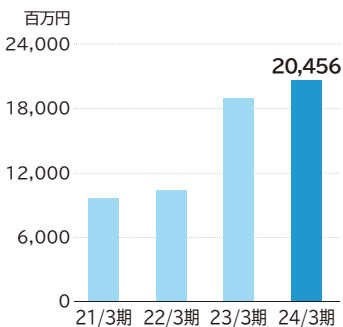
### 1株当たり当期純利益



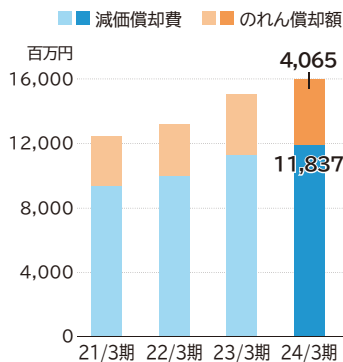
### 1株当たり配当金・配当性向



### 設備投資額



### 減価償却費・のれん償却額



### 研究開発費

